図書館ができること、今求められていること

2019年7月

眞鍋由比

元町映画館で映画「ニューヨーク公共図書館　エクス・リブリス」を見た。世界で3番目に大きな図書館。「忍耐と不屈」という名のライオンが両側に座り、映画「ティファニーで朝食を」でヘプバーンがカード目録に感心し、漫画「BANANA　FISH」のアッシュが最期を遂げた場所。レファレンスの電話でいきなり中世英語を翻訳したり、スペイン語を話したりと専門家が対応、ロボットの作り方、老人向けダンスの講座、イギリス人科学者リチャード・ドーキンスの講演、エルビス・コステロのインタビュー。2015秋撮影。トランプが大統領選に勝利した2日後にこの映画は完成した。ワイズマン監督の話では「特に政治的なアピールをするつもりはなかったのに、政治的な映画になってしまった。このニューヨーク公共図書館の存在自体と日常活動によってトランプに対抗しているから。」

この映画のダイジェスト版を大阪市立図書館で観たときも満席だった。もとより元町映画館は14時に入って18時にでてくる（途中休憩15分）かなり長い映画なのに立ち見がでていた。注目されているのは今もっとも必要とされている価値観だから？クビになっても図書館にいったら就職口を世話してくれ、病気になったら治療の選択肢が見つけられ、ネット環境が家になくてもWifiルーターを貸してくれて、各種データベースも使わせてくれるから？目が見えなくなっても点字の読み方を教えてくれ（ヘレン・ケラーも利用していた）、決して大げさではなく市民の生活を実際に助けている。

「図書館は本の倉庫ではない。人なんです。好奇心を探究するひとが主役の場なんです。」ヨーロッパで図書館に携わった人が話しているのが印象的。ニューヨーク市は補助を出しているが、市立の図書館ではない。半分は寄付。非営利民間団体が運営している、市民のための「知的インフラ」を。

常連がライザ・ミネリ、歴史家アーサー・シュレジンガー、ノーベル賞作家トニ・モリスン、サマセット・モーム、アンディ・ウォーホル、ダスティン・ホフマン、アル・パチーノ、トミー・リー・ジョーンズ、ベッド・ミドラー、ライザ・ミネリ、ウッディ・アレン、スパイク・リー
先月紹介した「プーさん」のぬいぐるみたちのオリジナルもNYPL（ニューヨーク公共図書館）の所蔵。グーテンベルグ聖書もジェファソンの自筆の独立宣言の草稿も。

資料をデジタル化する過程や各分館に資料を配送するベルトコンベアーの大量で猛スピードなところはワクワクする。

けれど図書館員からみれば天国のような場所だけど日本と同じ悩みもある。
電子図書と紙の図書の割合も悩ましい。「ベストセラーを大量に購入すれば貸出実績は目覚しく上がるけれど、20年後に図書をほしがった人に図書館がもっていなければどうやって資料へのアクセスを保障する？」「ホームレスとホームレスでない人が閲覧室にいたらホームレスでない人はホームレスを避ける。でも利用者としてどちらも排除はできない。席数は限られている・・・」

個人的には、聴覚障害者の手話通訳のワークショップでジェファーソンの「独立宣言」の草稿を怒ったように読むのか、懇願するように読むのかで同じ動作なのにまったく印象が違うのもすばらしいと思った。聴覚障害者の方に、健常者と同じように怒ったり笑ったり涙したりしてほしいと、通訳の方は伝えていた。「私たちはパフォーマーではないけれど、その内容を理解してつたえることに心を砕いている。」

「自宅で一人きりでスマホをいじるだけ状況が当たり前になっている今こそ、図書館という物理的な場所が圧倒的に必要になっている」とNYPLの渉外担当員キャリー・ウェルチさんが言っていた。人と人とが交流し、作り上げているPeople's Palace（人々の宮殿）。古今東西の図書館でもずば抜けた存在。「学校にいきたくなかったら図書館においで」と言った日本の司書がいたっけ。多様な価値観を認め、人間を尊重する図書館。自分がここにいてもいいのだと教えてくれる場所。不景気だからと一番最初に削られるのが図書館の予算だけど、一番削ってはいけない場所だと感じている人が多いからこの映画、各上映館で満席が続出しているのではないだろうか。

岩波新書『未来をつくる図書館　－ニューヨークからの報告－』菅谷明子著（2003）は16年も前のことなのに、やはりすばらしいNYPLの活動が詳細に語られて興味深い。児童図書館のパイオニアキャロル・ムーアの活躍や医療情報の提供など、驚くばかりです。